

保存の はなしをしよう。

20 きっとみんな
迷ってきたから

昨年度、ヘンリー杉本の《カーメルハイランド海辺》(1937年)を修復しました。和歌山市に生まれた杉本は、移民としてアメリカに渡って画家になったひとりです。第二次世界大戦中は、敵性外国人として強制収容所にいました。収容所へ行くときには、手に下げられるだけの荷物しか持てなかったといえますから、この作品を持って行けたでしょうか。戦争の間、杉本の手元にはなかったのならこの作品が、誰の、どのような善意によって守られてきたのか、想像しないではいられません。

所蔵作品の修復は、作品を調査しながら修復家とよく話し合ったうえで処置に入りますが、処置の途中でしばしば話し合いが必要です。処置が進むにつれて、見つかるものがあるからです。

この作品の困ったところは、キャンパスがゆがんで画面に凸凹が目立つこと、絵具の層が浮き上がり、剥落しそうになっていること、剥落を補うためにあとから補筆したところが不自然なことでした。通常なら浮き上がりを押さえ、キャンパスの歪みを直して、以前の補筆をのぞいてから、欠けた部分を埋め、あらたに補筆するのですが、不自然な厚ぼったい補

彩をのぞいていたところ、古い構図が出てきました。具体的には、遠景にあたる、水平線にある岬がいまより長く、遠くの湾をすっかり囲んでいたのです。

最初の構図に戻すべきかどうか。風景写生としては、最初の構図が正しかったのでしょうか。しかし、その構図では、水平線へ向かう開放感が失われてしまいます。どちらにするかを決めるときには、誰が補筆をしたのかが重要になってきます。

この作品は、杉本が1968(昭和43)年に日本で開いた個展に出品した1点です。木枠から外され、水濡れした状態で保管されており、展示のために、弱ったキャンパスの耳に別のキャンパスを貼り付け、それで引っ張って木枠に張ったようです。絵具が剥げたところも多く、上から油絵具が重ねられていました。図録の図版を見ると、存命だった杉本が自ら筆を加えたのだと考えられます。杉本が良しとした開放的な構図を尊重し、今回は、新しい描画層の下にあった岬はあらためて補彩して隠したままとしました。

このような判断にあたって、迷わない人はいないでしょう。しかし加筆について新しい事実が明らかになり、今回の処置を変えなければならなくなっても、今回の補彩は特定の方法で簡単に取り除けます。また、もっと良い材料や技術が開発されたときにも、同様にやり直すことができます。このような、元に戻せる「可逆性」のある技術や材料が発展したのは、いつの時代にも修復についてはさまざまな考え方があって、それが変化しており、いままでみんな迷ってきたからに違いありません。また、それだけでなく、保存や修復という仕事には、つねにもっとよい方法が見つかるという、未来に希望を持ち続ける一面があることを改めて感じています。(植野比佐見)

左) 痛々しい修復前 中) 絵具の層が剥げ落ちそうになっていました 右) 修復中。加筆をとってみると岬が長かったことがわかりました。ところどころ四角く明るい部分は、表面の汚れと変色したニス除去したところ



MUSEUM CALENDAR

開館/9時30分-17時00分(入場は16時30分まで)
休館/毎週月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

2022.2.8(火)-4.17(日)

コレクション展 2022-冬春 特集:若き日の野長瀬晩花

当館のコレクションをテーマごとに紹介するとともに、特集として、日本画家・野長瀬晩花の若き日の活動を、作品と多数の旧蔵資料によってたどります。

2022年度の展覧会

2022.4.9(土)-6.26(日)

モダン・プリンツ
コレクションにみる世界の版画

モダン(近代)という時代にとって、表現としての版画はどのような役割を担ってきたのでしょうか。国内屈指の規模を誇る当館の版画コレクションを中心に紹介します。



アンリ・マティス『JAZZ』より
《イカルス》1947年 当館蔵

2022.4.29(金・祝)-7.3(日)

コレクション展 2022-春夏
特集:生誕130年 田中恭吉

当館のコレクションをテーマごとに紹介するとともに、特集として、今年生誕130年を迎えた田中恭吉の作品をおよそ10年ぶりにまとって紹介します。



田中恭吉《少女》1914年 当館蔵

メールマガジン Facebook Twitter ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。またFacebookやTwitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアパローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000円 学生会員 3,000円

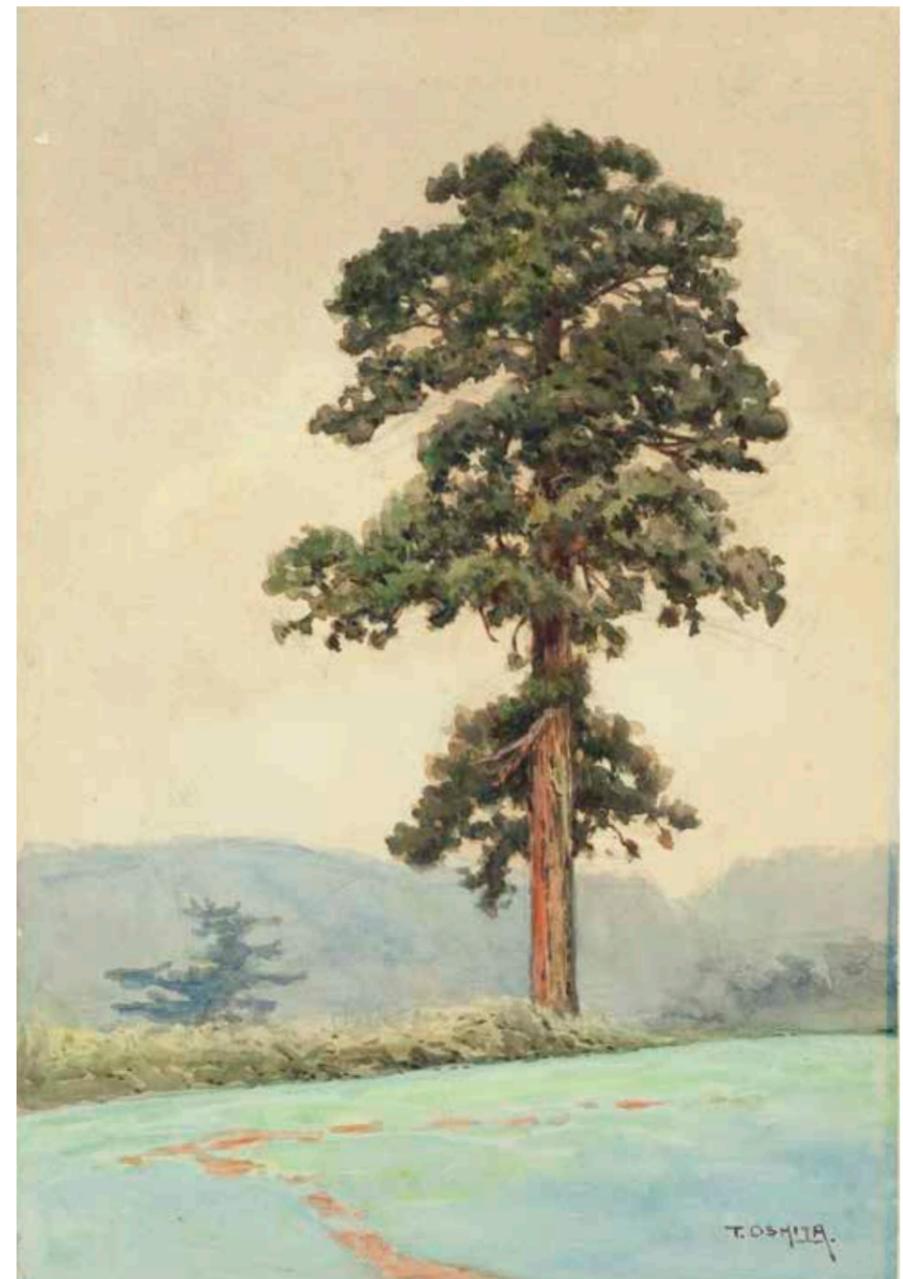
ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690 担当: 中川



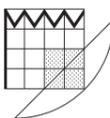
MOMA Wakayama

news

2022 n°110



大下藤次郎《一本杉》1909年 当館蔵



大下藤次郎の作品から コレクションの広がりにつながり

大下藤次郎 (1870-1911) の水彩画、《一本杉》(表紙、図1) は、2019 (令和元) 年度に寄贈を受けた新しい収蔵作品です。昨年開催した「和歌山の近現代美術の精華」展 (以下、精華展) において、北山清太郎 (1888-1945) と美術の関わりを紹介するコーナーではじめて紹介しました。作品は大下の妻、宮嶋春子の従姉妹である宮嶋ときと今村信次郎^{註1} 夫妻の元に伝わったものです。まずは、大切な作品を当館へご寄贈くださったご寄贈者ご家族のみなさまに、この場を借りて改めて深く感謝申し上げます。

作者の大下は、明治の開国以降、西洋から本格的に伝わった水彩画を、明治20年代半ばから専らとした画家です。明治40年代にかけて日本各地を旅して風景を描き、さらに普及活動を通して全国にその魅力を広めることで、日本における水彩画のパイオニアとなりました。当館では、2018 (平成30) 年2月から3月にかけて、大下のまとまったコレクションを所蔵する島根県立石見美術館より作品を一括して借用し、「明治150年記念 水彩画家・大下藤次郎展」を開催しましたので、作品や名前をご記憶の方もおられるでしょう。なにより、当館におけるこの展覧会の開催が、本作を当館へご寄贈いただくきっかけとなりました。

作品には、小高く開けた場所に生えた、一本の杉を中心とした風景が描かれています。背景に山並みがのぞきますので、大下が好んで旅し、絵にした山地の風景だと考えられます。中央に配された杉は、少し見上げるような視点から描かれ、遠くに山並みは見えつつも、背景の半分以上を空が占める構図がとられています。その構図からは、低い場所から歩みを進めてきた大下が、大空に向かって木がそそり立つ風景に感興を覚えたことを感じとることができます。

タイトルと制作年は、額の裏板に貼られたラベル (図2) と書き込みから判断しました。ラベルには、「大下藤次郎遺作売立展出品」とあり、そこに画題として「一本杉」と書かれています。同じラベルには、昭和3年、つまり1928年5月26日から30日までという展覧会の会期と、日本橋三共ビル、日仏画廊という会場名、室内社画堂という主催者の名前も印刷されています。また、ラベルの左下には「45」という数字が書かれ、その右には鍵のような形の青いスタンプが押されていました。



図1 大下藤次郎
《一本杉》1909年
35.4×24.3 cm /
36.3×25.4 cm (シート)
当館蔵

この「大下藤次郎遺作売立展」は、大下家に残されていた作品によって構成されたもので、目録 (図3) が残されています。それを確かめると、「一本杉」というタイトルの作品はリストの45番にあり、制作年は明治「四二」、つまり1909年。サイズは「1.17×.80」尺、つまりおよそ35.5×24.2cmだと書かれています。この寸法は本作と一致し、裏板の「45」という数字は出品番号と一致します。これらのことから、本作がまさにその展覧会に出品された45番の「一本杉」に相当すると考えられ、作品からは分からなかった制作年を知ることもできました。本作は、おそらくこの展覧会に際して妻の従姉妹の所有となったと考えられ、その後、ご親族に引き継がれてきました。もちろんラベルを透明のテープで固着したのは後年であり、寄贈者のご家族によるものかどうかはわかりません。

さて、当館での「大下藤次郎展」でも紹介したように、大下は1901 (明治34) 年に水彩画の手引書、『水彩画之槩』(図4) を刊行したことをきっかけに、日本全国に水彩画ブームを起し、多くの若者を美術の道へと導きました。手軽に絵を描くことができる水彩画の普及を通して美術の裾野を広げることで、大下は同時代だけでなく、続く時代の美術を豊かにすることに貢献します。当館では収蔵できていなかったその作品が、コレクションに加わるだけでも貴重なのですが、さらに大下が及ぼした和歌山の人々への影響を考えると、当館にとってはより大きな意味を持ちます。大下が起こした水彩画のブームは、ここ和歌山にも及んでいたからです。

2016 (平成28) 年度に開催した「動き出す! 絵画 ペール北山の夢」展 (以下、「動き出す!



図2 大下藤次郎《一本杉》、額裏板のラベル



図5 川上涼花《風景》1909年 当館蔵

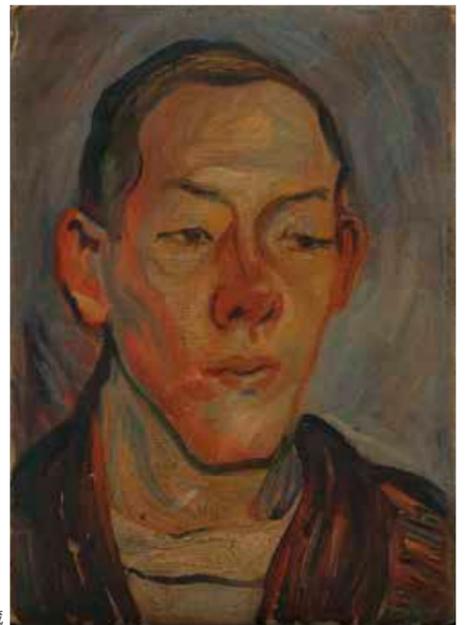


図6 岸田劉生《男性肖像》1912年 当館蔵

絵画」展)^{註2} において、キーパーソンとした和歌山市生まれの北山清太郎は、直接大下と交流を持ちました。同展で紹介したように、北山は『現代の洋画』などの美術雑誌や、岸田劉生 (1891-1929) らによる展覧会の運営や目録の編集、発行を中心に、明治末から大正中中期にかけて、同時代の美術と密接に関わりました。その北山が、若き日に美術への関心を深めたのは大下の影響でした。北山は、多くの若者と同様に水彩画を描きはじめ、大下が水彩画に関心を抱く人々への情報提供と交流の場として発行していた雑誌、『みづゑ』に投稿を行ったほか、仲間と水彩画のサークルを作って展覧会を開催、会報の発行も行います。さらに、1911 (明治44) 年には大下による日本水彩画会の大阪支部を立ち上げたのち、上京してそのもとで働きはじめます。

北山が上京してすぐに大下が急逝したため、北山は『みづゑ』の編集を数号引き継いだのち、独立して美術雑誌の発行など、美術に関わる事業を自ら展開しはじめます。しかし、雑誌を通じての情報の発信と交流の場の提供、地方における絵画講習会の実施など、北山が手がけた事業のモデルは大下の活動にあります。「動き出す! 絵画」展の際には、大下の作品

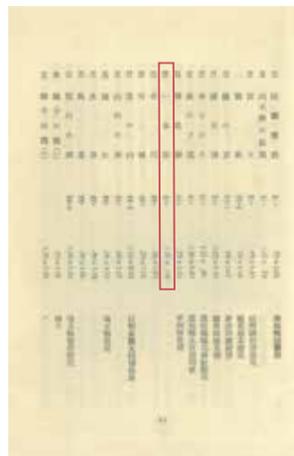
は他館から借用してこの経緯を紹介したのですが、今度の「精華展」では自館の作品と資料によって構成することができました。そこには「動き出す! 絵画」展の後、当館のコレクションに加わった、北山の旧蔵になる川上涼花 (1887-1921) の《風景》(図5) と岸田の《男性肖像》(図6) も並びます。

岸田も『水彩画之槩』を手にして独学により絵を描きはじめたひとりです。川上は大下が出品を続けた太平洋画会の教場で絵を学びました。その水彩画《風景》が、大下の《一本杉》と同じ1909年の制作であることも興味深く、その後、岸田と川上は1912 (明治45 / 大正元) 年にフウザン会 (当初ヒュウザン会) という革新的な美術グループに参加し、北山がその展覧会の運営や目録の発行を手がけることを考えると、明治時代から大正時代にかけての美術の流れをコレクションによって示すこともできます。

また、雑誌『みづゑ』が誌上で行った作品の品評会には、和歌山からの応募がありました。例えば、「精華展」の出品作家の日高昌克 (1881-1961) も応募者のひとりです。医業のかたわら絵を描き、後年画業に専念することになる昌克は、医学生時代に作品を投稿しています。同じく「精華



図3 『大下藤次郎遺作売立展目録』
1928年発行 島根県立石見美術館蔵



11頁の45番に「一本杉」と記載



裏表紙



図4 大下藤次郎『水彩画之槩』新声社
1901年発行 個人蔵

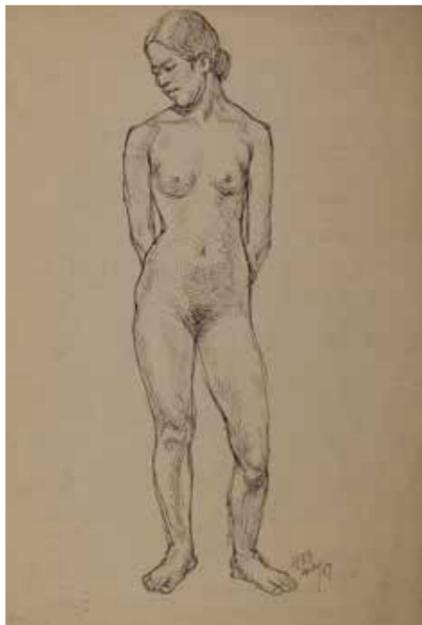


図7 西田武雄《裸体デッサン》1933年 当館蔵



(参考) 受入時の額に入った状態



図8 笠木實旧蔵のプレス機 *自身が入手したものは戦時中盗難に遭い、これは清宮質文からその後譲られた鶴田吾郎旧蔵のものだという。



展」の第2部において、作品の全体像をはじめで紹介した写真家の島村逢紅(1890-1944)の名前も誌上に見られます。島村は、1907(明治40)年に大下が大阪で開催した水彩画講習会にも参加しました^{註3}。初期の島村の写真に見られる構図のとり方やソフトフォーカスによる淡い画面が、水彩画の画面との近しさを感じさせることも興味深い点です。さらに島村に関しては、旧蔵品に『みづゑ』と『現代の洋画』が含まれていたことも、「精華展」に係る調査の大きな発見でした。まさに生の読者が手にしていた雑誌が、そのまま残されていたからです。当時の若者が美術に心を躍らせていた気持ち、大下や北山の雑誌を通じていま伝えられました。

「精華展」の出品作家のなかでは、新宮市に生まれ、美術、建築、教育など多方面で活躍した西村伊作(1884-1963)は、広島での学生時代に『水彩画之葉』を手にして水彩画を描いたことを自伝^{註4}のなかで回想しています。また洋画家の川口軌外(1892-1966)が最初に絵を描いたのは、北山が1911(明治44)年に和歌山市で開催した絵画講習会でした。大下の事業が北山を通じて、当時和歌山県師範学校の学生だった川口を洋画家の道へと導くことになったとも言えます。今回、大下の作品がコレクションに加わったことにより、こういったつながりや和歌山の美術に関わる歴史が、作品を通してより広く紹介できるようになりました。

最後に、額の裏板にあったスタンプについても触れておきます。この鍵の形のようなスタンプは、展覧会の主催者である室内社画堂のマークです。室内社画堂は、銅版画家の西田武雄(1894-1961)が1923(大正12)年に東京に開いた画廊です。西田は若い頃、大下が開いた水彩画の講習所で学びますが、銅版画の研究と制作へと進みました。版画家に転身した西田は作品を制作するだけでなく、研究の成果を元に『みづゑ』誌上に技法の解説を連載し、その後さらに銅版画の普及活動に熱心に取り組むようになります。1931(昭和6)年には「日本エッチング研究所」を設立し、技法書の出版、版画雑誌『エッチング』の発行、版画のプレス機の販売、各地での版画講習会の開催など、大下が水彩画で行った普及事業を銅版画において展開していきます。大下家に残る遺作を頒布するという大切な展覧会の開催にあたり、西田は若い頃からのつながりにより、その運営を任せられる

ことになったのでしょう。裏板のスタンプは、ラベルとともに「大下藤次郎遺作売立展」出品の証でもあります。大下家に残された先述の目録の裏表紙(図3)には、同じスタンプが押されています。

長らく版画を活動の主要な柱のひとつとしている当館では、銅版画の発展に重要な役割を果たした西田の作品は、収蔵作家や作品とのつながりからも、コレクションに加える必要があると考えながら、長らく所蔵できずにいます。ところが大下の作品をご寄贈いただく1年ほど前に、版画ではないのですが、西田の裸体デッサン(図7)を5点、日本エッチング研究所で銅版画を学んだ画家、笠木實(1920-2018)の旧蔵コレクションとしてご寄贈いただく機会に恵まれました。そのコレクションには、西田が販売した銅版画のプレス機(図8)も含まれています。

細かな断片がつながることで、コレクションのなかで歴史は少しずつ紡がれていきます。調査研究、展覧会、作品収集を連携させながら、少しずつそれを形にしていくことが、美術館や博物館の大切な仕事だということを改めて実感します。

(宮本久宣)

註

- 1) 今村信次郎(1880-1969)は、海軍の軍人。1905(明治38)年の日本海海戦時には戦艦三笠に搭乗。のち海軍中將となり、第三艦隊司令長官も務めた。
- 2) 詳しくは、『動き出す!絵画 パール北山の夢』展図録(和歌山県立近代美術館、東京ステーションギャラリー、下関市立美術館、2016年)を参照。
- 3) 島村逢紅、また「精華展」については、『和歌山の近現代美術の精華』展図録(和歌山県立近代美術館、2021年)を参照。大下藤次郎の活動と和歌山の人たちのつながりについては、宮本久宣「水彩画の広がり 大下藤次郎と和歌山のひとびと」『和歌山県立近代美術館ニュース』No.93(和歌山県立近代美術館、2018年2月)、宮本久宣編『水彩画家・大下藤次郎展』パンフレット(和歌山県立近代美術館、2018年)にも記した。
- 4) 西村伊作『我に益あり』(紀元社、1960年)、130-131頁に記載。

*本文中、美術家には名前に続き生没年を()内に入れて示しました。



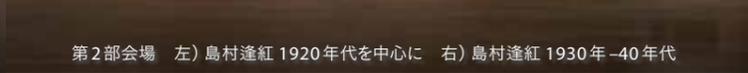
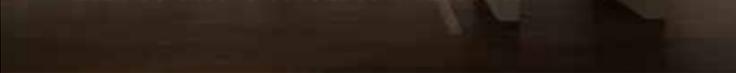
第1部会場 左) 下村清時/下村観山/川端龍子 右) 山名文夫



「和歌山の近現代美術の精華」展より

第1部 観山、龍子から黒川紀章まで 第2部 島村逢紅と日本の近代写真

2021(令和3)年10月23日~12月19日



第2部会場 左) 島村逢紅 1920年代を中心に 右) 島村逢紅 1930年-40年代

海と山に囲まれた自然風土を背景に、独自の歴史と文化を育んできた和歌山県は、昨年、誕生150年を迎えました。これを機に、「紀の国わかやま文化祭2021」と連携して開催した「和歌山の近現代美術の精華」展は、館蔵品はもとより国内各地から、和歌山の近代と現代をめぐる重要な作品を集めて紹介し、和歌山で育まれた文化の魅力をご覧ください。展示室を全館使って2部構成で開催しました。

和歌山県は、明治期以降の美術の歴史において、大きな功績と独自の足跡を残した美術家を数多く輩出しています。日本画の下村観山や川端龍子、洋画の川口軌外や村井正誠、版画の田中恭吉や彫刻の建島大夢、保田龍門がそうです。また大正期に和歌山県出身の美術家を集めて南紀美術会を創立した徳川頼倫や徳川頼貞、文化学院を開校した西村伊作など、美術家がそれぞれの世界を築くために大切な貢献をした人物がいたことも忘れられません。そして、デザインの分野で活躍した山名文夫、戦後の美術の展開に重要な役割を果たした建島寛造や浜口陽三、また、まさに現在も活躍を続ける松谷武判や野田裕示、鈴木理策など、各分野で現代の美術をかたちづくる美術家もいます。

第1部「観山、龍子から黒川紀章まで」では、本県ゆかりの美術家とその支援者たち、そしてそれぞれの仕事を紹介し次世代につなぐ場として、当館の建物を設計した黒川紀章まで、多様な作品や資料を一堂に集めてご覧いただきました。出品作家および団体は下記のとおりです。

- 【日本画】 下村観山、川端龍子、野長瀬晩花、日高昌克、裨田一穂
- 【洋画】 川口軌外、原勝四郎、石垣栄太郎、村井正誠、松谷武判、宇佐美圭司、野田裕示
- 【彫刻】 下村清時、建島大夢、保田龍門、建島寛造、保田春彦
- 【版画】 田中恭吉、恩地孝四郎、逸見享、吉田政次、浜口陽三
- 【写真】 鈴木理策
- 【デザイン】 山名文夫、黒川紀章と和歌山県立近代美術館・博物館
- 【美術文化】 南紀美術会、西村伊作とその周辺、北山清太郎とその周辺

そして第2部「島村逢紅と日本の近代写真」では、明治末から戦前期にかけて活躍した和歌山市出身の写真家・島村逢紅を、交流のあった福原信三や、逢紅を中心に結成された木国写友会の写真家たちとともに、初め

- 左) 図録「第1部 観山、龍子から黒川紀章まで」
- 右) 図録「第2部 島村逢紅と日本の近代写真」



て本格的に紹介しました。

当館は、1963(昭和38)年に開館した和歌山県立美術館時代の前史も含めて、1970(昭和45)年に和歌山県立近代美術館として出発してから今日に至るまで、和歌山の「近現代美術」を発掘して展覧会を開催し、作品収集を継続してきました。本展覧会は、こうした長きにわたる当館の活動を踏まえて構成しましたが、さらに下村清時(彫刻)、山名文夫(デザイン)、黒川紀章(建築)、島村逢紅(写真)、南紀美術会など、これまでなかなか紹介できなかった作家および団体の作品や資料も展示することで、和歌山の近現代の美術をあらためて見つめ直す機会ともなりました。

展覧会は、館長のもと学芸員7人で取り組み、第1部の図録では、28の作家と団体についてそれぞれ解説や論考を執筆するとともに、年表では明治以降の和歌山県に関連する美術動向が、美術館の展覧会活動とともにまとめられています。第2部の図録は、島村逢紅初めての回顧展図録となりました。

展覧会会期中は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が少しおさまっていた頃であったとはいえ、来館が困難な状況は続いており、ひとつの解決策として、当館ウェブサイトにて、360°ウォークスルービューで展示をご覧いただけるページ「MOMAW360」(<https://www.momaw.jp/momaw360/>)を開設しました。同ページでは、2021年度に開催したほかの展覧会、「疎密考」、「コミュニケーションの部屋」、「なつやすみの美術館11 野田裕示『集まる庭』」、そして黒川紀章設計による当館建築も楽しむことができます。

以上、展覧会について少し振り返ってみましたが、本展に関連した新たな発見や、図録に掲載しきれなかった調査の成果などは、今後のニュースなどでも紹介していく予定です。

(奥村一郎)

美術館と学校との取り組み



図1 作家についてまとめる生徒たち



図2 リーディング・コーナーに設置されたプレゼンボード



図4 美術館での鑑賞の様子

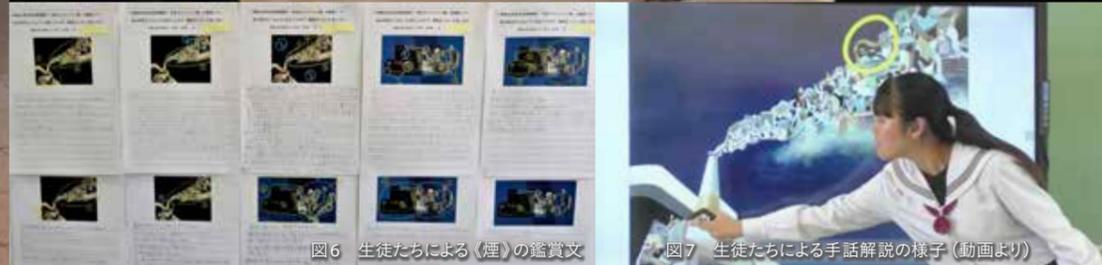


図6 生徒たちによる《煙》の鑑賞文



図7 生徒たちによる手話解説の様子(動画より)

(1) 紀の国わかやま総文2021(第45回全国高等学校総合文化祭)での和歌山県立粉河高等学校との取り組み

今年度も新型コロナウイルスの流行とその抑止に翻弄された一年でしたが、そのなかにあっても和歌山県では全国的な文化の祭典が開催されました。

ひとつが2021(令和3)年7月31日(土)から8月6日(金)にかけて開催された「紀の国わかやま総文2021(第45回全国高等学校総合文化祭)」であり、もうひとつが10月30日(土)から11月21日(日)にかけての「紀の国わかやま文化祭2021(第36回国民文化祭・わかやま2021、第21回全国障害者芸術・文化祭わかやま大会)」でした。当館でも「紀の国わかやま文化祭」の特別連携事業として、「和歌山の近現代美術の精華」展を開催しました。

また高校における「文化部のインターハイ」ともいわれる「紀の国わかやま総文」では、県民文化会館、県立博物館とならんで、当館も美術・工芸部門の会場となり、7月31日(土)から8月4日(水)まで、全国の高等学校美術部から選ばれた作品の展示が行われました。

昨年の高知大会がコロナ禍のため史上初のウェブ開催となり、展示や演奏などが行えなくなってしまったことから、全国の関係者にとって今年こそ実際に開催したい大会であり、感染対策に気を配りながらの開催となりました。

全国から美術部の学生が訪れる機会であることから、当館では、和歌山ゆかりの作家や美術館の活動について知って帰ってもらいたいと考え、地元の高等学校とも連携した取り組みを計画しました。残念ながら、感染拡大予防の観点から、展示室での作品解説や鑑賞会などを実施することはできず、来県したみなさんとの交流は十分に持てませんでした。しかし、総文祭の会期中に開催していた「なつやすみの美術館11」(2021年7月17日～9月26日)では、美術・工芸部門の開会式において、講演と講評を行った野田裕示さんの作品を、野田さんが触れてきた現代の美術の展開とともに見てもらうことができました。また同会期の「コレクション展2021—夏」は、当館所蔵作品のエッセンスとも言うべき内容で構成し、明治以降の美術の形成に和歌山ゆかりの作家がいかに関わってきたかをコンパクトに見ていただくことができました。

さらに、この「コレクション展2021—夏」と連携して、県立粉河高等学校

(以下、粉河高校)では3年生の「総合美術」の授業で和歌山ゆかりの作家の学習に取り組み、作家を紹介する「プレゼンボード」の制作につなげました。

高校生たちが、出品作家の中から、神中糸子、保田龍門、川口軌外、浜口陽三、石垣栄太郎、湯川雅紀の6名を選び、それぞれの経歴、作品の特徴などを調べ、似顔絵とともに紹介する内容です。これらのボードは、展示室入口前の、リーディング・コーナーに設置し、作家について知ってもらうひとつのきっかけとなりました(図1、2)。

さらに同校では、和歌山大学教育学部附属小学校と連携して、高校生が小学生にこの授業で学習した作品と作家を紹介するという授業をオンラインで行いました。授業時間の制約がありましたので、予め小学校でアンケートを行い、6人の作家の中から川口軌外とその作品である《少女と貝殻》を取り上げることとなりました。

11月15日(月)、粉河高校と附属小学校をインターネット回線で結んだ授業が行われ、高校生が作家である川口や作品の内容について、学んだことを授業で伝えていきました(図3)。高校生にとっては、自分たちが授業を行うという体験を通して、さらに深い学びへの意欲が生まれたようです。また、美術館に隣接する附属小学校の生徒たちは、しばしば来館して目にしてきた作品の作家や、そこに描かれた内容について、年代の近い高校生からの授業を通して改めて知ること、一層の興味が湧いたようです。

総文祭にしても国文祭にしても、数十年に一度という特別な機会ですが、今回の取り組みを特別な一度きりのものとせず、美術や文化に触れ、学ぶ機会を増やすことに、続けて取り組んでいきたいと考えています。



図3 オンライン授業の様子

(2) 和歌山県立和歌山ろう学校との鑑賞の取り組み

和歌山県立和歌山ろう学校は、当館まで車なら5分ほどのところにあり、これまでもしばしば来館されていましたが、昨年1月に開催した「コレクション名品選」に来館されたことをきっかけに、今年度、授業で作品の鑑賞に取り組みすることになりました(図4)。

聴覚の障害は、その状態や程度により困難のあらわれ方はさまざまです。聴覚からの情報が入りにくいことで、言語の獲得や発達に課題をもたらす場合があります。また、文章の読解や、自分の思考を第三者に伝えること等の困難さに繋がることもあり、展覧会では解説やキャプションを読み取ることが困難な場合もしばしばあるようです。展覧会のあいさつ文だけでも手話の映像があれば、一般的には聴覚障害を持つ人たちにとって、美術館への来館のハードルが下がる場合もあり、それも必要なことなのだという認識を新たにしました。

ただ、生徒の皆さんにとっては、既にかかれている文章を手話にするのでは、言い直すだけになってしまつてつまらないのではないとも思われました。作品を見るという自分自身の体験を手話で表現してみる方が、本人たちにとっても、他の人たちにとっても学べるのではないかと提案したところ、授業で取り組むことを快諾いただきました。

この授業に取り組んだ中学部の生徒5名は、美術館に来るのも実際に作品を見るのも、このときからはじめてでした。来館して作品を見ること自体



図5 高井貞二《煙》
1933年 当館蔵

がよくわからない体験だったようですが、それでも気になる作品があり、展示されていたなかから2点を選んで、よりじっくり見ていくことになりました。

生徒たちが選んだのは、高井貞二の《煙》(図5)と村井正誠の《URBAIN No. 1》です。まず、これらの作品を見た時の、最初の感想を文字にするところから出発して、自分が抱いた感想が作品の中の何を根拠にしているのかを自身で検討し、さらにそれを言葉で表現していきました。その過程で、作品の中に描かれているものを読み取り、読み解いていくことになります。

美術館から学校での授業にお邪魔して、生徒のみなさんの読み取りが、作品のどういったところに基づくのかを指摘し、自分たちの考えていることの根拠の示し方を提案しました。何度か作品から読み取ったことを文章にすることを試み、その文章を手話でどのように表現するか工夫して学ぶという過程を経て、美術館ではふたりの生徒が手話で鑑賞した内容を伝える映像を、2点の作品を展示した「コレクション展2021—夏」と「コレクション名品選」(2022年1月8日～1月23日)の期間に放映しました。

《煙》の中に描かれている人物には顔が描かれていないから、亡くなった人ではないかと解釈した生徒が数人いましたが、身内の葬儀に立ち会った経験や、この時期、特にインドで新型コロナウイルスが猛威をふるい、多くの死者が露天で茶毘に付される衝撃的な映像がニュースで放映されていたことが、読解に影響したかもしれません。

この取り組みは、国語科の授業として行われましたが、さらにその後、同じ作家の他の作品を調べ、その作品が描かれた時代背景を歴史として学ぶといった内容に発展しました。歴史学習については、和歌山市立博物館を訪れて、当時の暮らしや世相について学ぶことにも広がりました。

生徒たちは、美術作品の鑑賞を通じて、視覚的な情報を読み取って根拠を示しながら言葉であらわすとともに、手話の能力を高め、さらに広い知識への興味の扉を開くことに取り組んだことになります。学校では国語、美術、歴史、総合的な学習という、教科を横断した学習が進められました。

学校と協力しての取り組みはもちろんですが、障害の有無や内容にかかわらず、誰もが美術を見ることを楽しめるような取り組みを、これからも広げていきたいと考えています。

(奥村泰彦)